



Interview

with

アブドゥッラー・アル＝ハティーブ 監督

〈 映画「リトル・パレスティナ ―包囲下の日々―」 〉

聞き手：**岡崎 弘樹**

2022年2月6日（日）

主催：科研基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」
科研基盤研究（A）「空間・暴力・共振性から見た中東の路上抗議運動とネーション再考：アジア、米との比較」

Abdallah al-Khatib | アブドゥッラー・アル＝ハティーブ |



1998年、ダマスカス郊外ヤルムーク・キャンプに生まれる。ダマスカス大学で社会学専攻。2011年以前は「SOS子どもの村」調整員、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)のヤルムーク・キャンプ青年支援プロジェクト調整員。

同時にカメラマンとして記録映画『ヤルムークの若者』(2013)やショート・フィルム『私は青色』(2014)などの制作に関わる。2016年、スウェーデン外務省より人権擁護活動を評価して「パー・アンガー賞」を受賞。『リトル・パレスティナ』は2021年山形国際ドキュメンタリー映画祭「アジア千波万波」部門で大賞(小川紳介賞)を受賞したほか、国際的な映画祭で高く評価された。現在、新作『戦時下の子どもたち』を制作中。

岡崎 弘樹 | おかざき・ひろき |



1975年生まれ。専門は、アラブ近代政治思想、および現代シリア文化研究。2003年から2009年にかけて仏研究所研究員や日本大使館の政務アタッシュェとしてダマスカスに滞在。元政治囚の作家たちと付き合う中で、彼らの生命力と知的誠実さに感銘するとともに、19世紀以来のアラブ人思想家による自己批判の精神史の解明を志す。

2016年にパリ第3大学アラブ研究科で社会学博士号を取得。2022年4月現在、亜細亜大学国際関係学部多文化コミュニケーション学科講師。

著書に『アラブ近代思想家の専制批判—オリエンタリズムと〈裏返しのオリエンタリズム〉の間』(東京大学出版会、2021)、伊藤邦武ほか編集『世界哲学史VI 近代① 啓蒙と人間感情論』(第8章「イスラームの啓蒙思想」を分担執筆、筑摩書房、2020)。訳書にヤーン・ハージュ・サーレハ著『シリア獄中獄外』(みすず書房、2020)など。

ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文学的視座からグローバルに考究しています。2022年2月6日、プロジェクトの一環として、アブドゥッラー・アル＝ハティーブ監督のドキュメンタリー映画『リトル・パレスティナ—包囲下の日々—』のオンライン上映会を開催、上映後、岡崎弘樹さん聞き手に、監督インタビューを行いました(アラビア語通訳は森晋太郎さん)。上映に先立ち、岡崎さんが監督とおこなったアラビア語によるインタビューと併せて、監督との対話の記録をここに採録します。

Interview

アブドゥッラー・アル＝ハティーブ監督

Part 1. 上映前インタビュー

[聞き手：岡崎 弘樹]

岡崎 もともとアブドゥッラー監督は職業映画人ではなく、2011年以降の流れのなかで映画を撮るようになりましたね。すなわち「革命によって生まれた映像作家」と理解してよろしいのでしょうか。

アブドゥッラー シリア革命はシリアに従来あった映画とは異なるジャンルの映画を生み出しました。この新しいジャンルは「戦争の映画」と呼んでも良いでしょう。それらの映画のすべてではなくとも殆どが、シリアの戦争と直接結びついているからです。タラール・ディルキー¹やフィラス・ファイヤード²、ワアド・アル＝ハティーブ³の映画や、ズィヤード・クルスーム⁴の『セメントの味（日本語タイトル：セメントの記憶）』などはすべて、シリアでの戦争や革命、それらが人々に及ぼした影響についての作品です。

監督たちの殆どは旧世代ではなく、新しく映画の世界で活動を始めた人々です。従

¹ タラール・ディルキー (Talal Derki)：シリアの映画監督。1977年、ダマスカス生れ。2003年にアテネの映画学校を卒業。代表作に、シリアの民衆抗議運動に参加した若者を捉えた記録映画『ホームスに帰る』（2013年、日本語タイトル「それでも僕は帰る ～シリア 若者たちが求め続けたふるさと～」）、イスラム武装組織ヌスラ戦線メンバーの生活を内部から捉えた記録映画『父と子』（2017年、「父から息子へ ～戦火の国より～」）がある。両作品はサンダンス映画祭 2014年と2018年にて審査員大賞を受賞。

² フィラス・ファイヤード (Feras Fayyad)：シリアの映画監督。1984年、アレッポ生れ。代表作に、爆撃に晒されるアレッポ市街で市民の救助活動を行う組織ホワイト・ヘルメットに焦点を当てた『アレッポ 最後の男たち』（2017年）。同作品は第90回アカデミー賞長編ドキュメンタリー部門にノミネートされた。

³ ワアド・アル＝ハティーブ (Waad Al-Kateab)：シリアの映画監督・市民ジャーナリスト。1991年生れ。2009年にアレッポ大学に入学した後、2011年のシリア革命を経て英国チャンネル4の市民記者として活動。その後爆撃に晒されるアレッポ市街に住む人々と自らの私的な生活を撮影した記録映画『サマーのために』（2019年、エドワード・ワッツ監督との共同作品。日本語タイトル「娘は戦場で生まれた」）で国際的に名を知られる。

⁴ ズィヤード・クルスーム (Ziad Kalthoum)：シリアの映画監督。1981年、ホームスに生まれる。シリア国内の映画やテレビ番組制作で助監督を務めた後、シリア北部のクルド人文化を捉えた記録映画『嗚呼、我がところ』（2011年）でデビュー。自らシリア政府軍の予備役兵を離脱する姿を捉えた記録映画『不滅の軍曹』（2013年）を経て、シリアの戦乱を逃れながらもバイルートの高層ビル建設労働者として働く人々の姿を捉えた代表作『セメントの味』（2017年）にて国際的に名を知られる。

来の映画と新しい映画とのあいだには断絶があると言えるでしょう。ワアド・アル=ハティープの『サマーのために（日本語タイトル：娘は戦場で生まれた）』は彼女の初めての作品でした。私の場合も初めての作品で、殆どの監督たちがそうでした。出来事がある意味で助けになったのです。助けという言葉が適切かどうかは分かりませんが。シリアで起きていた多くの出来事があるって、人々の手にはカメラがあつて、体制がそれを禁止することはできなくなっていました。言い換えれば、人々は初めて正々堂々とカメラを使うことができるようになったのです。それはシリア革命以前の状況とは異なっていました。

岡崎 私がシリアに住み始めた頃（2003年）は誰も携帯なんか持っていませんでした。

アブドゥッラー もちろんです。

岡崎 しかし、それから10年経って多くの変化が起こり、誰もが携帯で撮影できるようになりました。まさにその10年という時代を経て、新しい映画監督を輩出する機会が生じたのだと思います。

アブドゥッラー そのことには正と負の両面があります。あなたの言ったポジティブな面は、撮影や映画の製作が可能になったということで、そのおかげでシリアで起きていることのイメージを明らかにすることができるようになり、人々は今ではシリアで起きていることを、映画を通じて知るようになりました。誰もがニュースを聞いたり新聞を読んだりするわけではありませんが、多くの人々は映画を見ることに関心があります。映画は人々の声を届けたり、シリアで起きている問題を明らかにする道具になったのです。

ネガティブな面だと私が思うのは、シリアの革命や戦争についてインターネットを通じて大量に拡散する映像には明確なコンテクストがないということです。そうした映像の大半は私から見れば、犠牲者や死んでゆく人々に対する敬意が欠けていて、彼らのことをまるでアイデンティティも名前もない単なる数字であるかのように見せるのです。血が流れている顔だとか、犠牲者の遺族の気持ちを害する映像がSNSで公開されて拡散されて、同じ場面を何度も繰り返し見せられるというのは非常に不快なことです。

3つ目の点は、そうした映像では起きている事柄を説明することができません。ヤルムーク・キャンプの出来事というキーワードで映像を検索して、それでキャンプで起きた事柄を直ちに理解するということとはできません。出来事を明らかにするストーリーがないということです。これは私にとってややネガティブな面の一つです。

岡崎 それについては最初に議論しなければなりませんね。重要なポイントですから。ただワアド・アル=ハティープさんは3年前の2019年に映画を完成させました。アブドゥッラー監督の場合、撮影されたのは2013年から2014年にかけてでしょうか。

アブドゥッラー 2015年までですね。

岡崎 それで本映画が公開となったのは昨年や一昨年であり、完成までに時間がかかったようですね。おそらく撮影した映像を映画作品として仕上げる上で困難に直面されていたのではないのでしょうか。

アブドゥッラー まず、私がシリアを出たのは2019年です。

岡崎 え、2019年なんですか。

アブドゥッラー はい。私は2013年から2019年までの間ずっと映像を撮影していましたが、映画の出来事は2013年と2015年の間に絞りました。それは政治的な理由で、それについては後で話しますが、2019年にシリアを出てから映画に取りかかりました。シリアにいて包囲と戦争のさなかでドキュメンタリー映画を作るのは不可能なことでした。

2019年から2021年までかかったのは、私はもともと特定のドキュメンタリー映画を作るために撮影していたわけではなかったからです。予め用意したシナリオはありませんでした。単に私がカメラを持っていて、キャンプでの人々の日常生活を記録したいという願望があって、ジャーナリストがあまり注目しない詳細や観点に光を当てたいと思っていた、ということです。それから後になって映画のことを考え始めました。キャンプの中で撮影した映像が約500時間分あったわけですから。

岡崎 なんと、500時間ですか。

アブドゥッラー はい。その500時間分を通じて何かを提供するにはどうしたらいいか、というと、それが映画を作るということでした。映像を何度も繰り返し見て、映画のための語りを組み立てるといのは難しい仕事でした。

作品を観た人は、ドキュメンタリー映画制作の古典的なタイプとは少し異なっていることが分かるでしょう。主人公がいて、それが始まりからクライマックス、締めくくりに向けて段階を経て発展していくというのが普通ですが、私の作品では主人公はキャンプです。キャンプの住民すべてが主人公なのです。一場面だけでも登場して、一言でも話した人物は主人公のようなものです。その証拠に映画の上映が終わったら、タスニームはどこにいる？ アブー・ラアフアトはどうした？ と質問する人が出てきます。それはつまり、一度登場しただけでも人々はその人物を記憶していて、人々の心の中ではその人物は主人公なのです。この作品の主人公なのです。

これは私にとって二つの理由で重要なことでした。一つ目は、それが包囲の現実についてより大きな信憑性とリアリティを与えるということです。それは監督一人がストーリーを語り、予め定められた立ち位置の上に組み立てられたものを明確な立場から提示する——それは自然なことではありますが——そうではなく、ここには様々な声があるのです。年をとった女たちもいるし、子供たちや男たちもいて、皆がこの場

所での自分たちのストーリーを語るのです。それがリアリティを与えるのです。

二つ目の点は、一人のヒーローという考えを打ち壊したかったということです。キャンプに一人のヒーローがいて、あとはみんな臆病者だとか、そういうことではありませんでした。一人のヒーローがいて、民衆を助けてくれるといった話になりがちですが、ヤルムークでは、私にとっては住民みんながヒーローでした。ただキャンプに残って、自分の家に居続けて、包囲を打破しようと試みつづけるというそれだけでもヒーローでした。だからみんな一人一人に主人公になってもらったのです。一人や二人、三人のヒーローではなく、キャンプにいる一人一人みんながヒーローだったので

このようにして映画を組み立てたときに、基本の線になるただ一つのポイントがあって、それは「尊厳」という考えでした。虐殺と野蛮な包囲の中で、人々が飢死することについて語りながら、同時に人々の尊厳を守るような映画を作ることがどうすればできるだろうか、ということです。それは彼らを物乞いや消極的な犠牲者のように見せないということです。ここで消極的というのは、何もせずに屈服してただ死を待っているだけの人々、ということです。そんなことはないのです。ヤルムークの人々は毎日、シリアの体制による包囲に抵抗しようとしていたのです。

岡崎 それについてもオーディエンスと議論しなければなりませんね。

アブドゥッラー 好きなだけ議論しましょう。

岡崎 それでは2019年までヤルムーク・キャンプにずっと残っていたのでしょうか。

アブドゥッラー いいえ、2015年にキャンプを出て、ヤルダという地域に移りました。知っているか分かりませんが、ヤルムークの近くです。

岡崎 はい、知っています。

アブドゥッラー ほぼグータのあたりです。ダーイシュ（IS）がヤルムークに入ってきて、私自身がダーイシュに狙われていたので、中に残ることは難しかったのです。さもなければ肅清されて、殺されていたでしょう。

ヤルムークの近くのヤルダに2018年の6月までいて、そのうちに強制移住が行われました。強制移住というのはシリアの体制が支配圏外の地域に対して組織的に行った措置です。その戦略は三つのステップを踏んで行われました。第一のステップは、その場所を包囲するということです。第二のステップは、その場所を組織的に砲撃するということです。そして第三のステップは、交渉の機会を設けるということです。そして、その場所に残ると引き換えに体制側に属して一緒に戦うか、その地域から強制的にシリア北部に移住させられるか、ということになるのです。

岡崎 イドリブ県⁵ですか。

アブドゥッラー いえ、イドリブだけではありません。イドリブやイアザーズ⁶や、あるいはその他の地域です。二通りの地域があって、イドリブはヌスラ戦線⁷があるので入れない人もいます。私もそうです。アレッポ東部のイアザーズの場合は自由シリア軍⁸の地域なので、私はそこに行きました。

私のような人間が、体制派にならずに自分の地域に居続けることは不可能だったのです。体制派になるか、さもなければ移住させられるかということです。私はシリア北部に移住させられて、難民キャンプに約4ヶ月いました。その後密入国で——他の人たちと同じように密入国で——トルコに入って暫く滞在して、2019年の初め、ちょうど今頃の時期にドイツに来ました。

岡崎 2019年まで国内に留まっていたとなれば、ワアド・アル=ハティーブ監督の映画と比べても、アブドゥッラー監督は多様な証言をとっているのではないのでしょうか。2019年まで500時間分、あらゆる事柄を撮影し、大きな記録となっているのではないのでしょうか。

アブドゥッラー 大量の映像がありますし、友人たちと一緒にもっと大量のアーカイブを集めました。ヤルムークの中で撮影された映像を全部集めることを試みて、そのアーカイブの一部のコピーを国連のシリアに関する真相究明委員会に、もう一つはシリアの戦犯を処罰するための「国際的な中立メカニズム (IIIM: International, Impartial and Independent Mechanism) の事務所に提出して、シリアの犯罪者に対する裁判で利用できるようにしました。

また一方では、誰でもこのアーカイブにアクセスできるようなプラットフォームの立ち上げに取り組んでいます。アーカイブを監修した委員会が設定する条件の下で利用を認めるのです。映像をどう利用するか明確にすることなど、必ず一定の条件が付くことになります。もちろんシリアの体制が映像を利用してヤルムーク・キャンプについての映画を作るということはできません。このプラットフォームを立ち上げて映像が利用できるように今も取り組んでいるところで、特にパレスチナ人とシリア

⁵ イドリブ県 (Idlib) : トルコのアンタキアと国境線を接するシリア北西部の県。シリアの戦乱において反体制派勢力の活動拠点、すなわち「解放区」となってきた。シリア各地の反体制派勢力は、政府軍による封鎖作戦によって疲弊した後、同県への移動を条件に一時的な解除と脱出を受け入れてきた。その後、同県はシリア政府・露軍機の継続的な空爆にも晒され、さらにはイスラーム武装組織やクルド勢力によっても一部制圧され、人道的にも極めて厳しい状況に置かれている。

⁶ イアザーズ : シリアの北西部でトルコと国境を接するアレッポ県の街。日本語表記ではアザーズとも記される。シリアの戦争下で政府軍や革命勢力、さらにイスラーム武装組織、クルド勢力の争奪の場となってきた。

⁷ ヌスラ戦線 : シリアの戦争下で台頭したイスラーム武装組織。アル=カーイダに忠誠を誓ったことで知られる。

⁸ 自由シリア軍 : シリアの戦争下で、政府軍からの離反兵で結成された革命勢力の軍事組織。

ア人がアクセスできるようにします。

岡崎 この映画はシリア人プロデューサーのムハンマド・アリー・アターシーさんと共に制作しましたね。

アブドゥッラー ムハンマド・アリー・アターシーが一人目のプロデューサーで、もう一人、フランス人のジャン・ロラン・クリスティアンがいます。この二人が映画の制作をしました。

岡崎 プロデューサー二人の支援は有用でしたでしょうか。

アブドゥッラー もちろんプロデューサーの存在は、第一に資金面で重要でした。映画制作はお金がかかりますから。もう一つには、アリー・アターシーはシリア人で、私としてはこの映画を作るにあたって、彼のシリア人としての意見がとても重要でした。ジャン・ロランはフランス人で、ヤルムークも私のことも母のことも知らない外国人としての意見が私には重要でした。この国際的なチームのおかげで、アラブであれヨーロッパ人であれ日本人であれ、誰でも理解することのできる映画を組み立てる助けになりました。たとえばこの映画がメキシコと中国という全くかけ離れた国で上映されても、フィンランドのヘルシンキやチュニスで上映されても、映画のメッセージは誰にでも届いているし、映画に対する観衆の反応の殆どは似通ったものになっています。

アラブや中東地域の監督が時々陥る一つの大きな問題があって、それは彼らが西洋向けの映画を作ろうとするということです。西洋のための、西洋が理解するための映画です。そうすると犠牲者は、自分について語っている映画を理解する権利を奪われることになります。それは倫理的な問題になってきます。カンヌ映画祭などの有名な映画祭に出品したいからと言って、その映画のナラティブをすべて白人の期待どおりに組み立てるということでは、私たちは非常に大きな問題に陥ることになります。

だから私たちにとってきわめて重要だったのは、第一にキャンプの住民たちを納得させ、本当に彼らのことを代弁し、表現する映画を作るということでした。そして第二に、地域の枠組みだけに限定されない、普遍的なものになるようにしました。外にも伝わらなければならないからです。その仕事は、この多様なチームが存在したおかげでうまく行ったと思います。

岡崎 素晴らしい。監督の講演は盛り上がるでしょう。

ところで、お父さんのジャマルさんは2年半にわたって政府に拘束されたことがエンド・クレジットに出てきますが、その理由は監督自身だったのでしょか。

アブドゥッラー そのとおりです。シリアの体制には活動家に対応する組織的な方法があります。たとえばアブドゥッラーをシリアの体制が指名手配しているけれども、支配地域の外にいるから逮捕できないというので、家族を逮捕するのです。兄弟や父

親や母親や叔父を逮捕して、本人にプレッシャーをかけるのです。そうすればアブドゥッラーは屈服して、家族の身の安全を恐れて、体制に反対する発言をやめる。それで実際に体制はシリアの多くの活動家の家族を逮捕して、プレッシャーをかけるために利用したのです。それが、体制が私の父に対してやったことです。

岡崎 現在はどうなんでしょう。

アブドゥッラー 大丈夫です。今は私と一緒にドイツにいます。

岡崎 一緒に出国されたのですか。

アブドゥッラー いいえ、一緒に出国したわけではありませんが、後になってシリアから出国させました。元気です。大丈夫です。

岡崎 よかったです。これで講演の準備は整いました。

Part 2. 上映後インタビュー

[司会：山本 薫 / 通訳：森 晋太郎 / 聞き手：岡崎弘樹]

岡崎 皆さま、映画をご視聴いただき、ありがとうございました。

今日はですね、アブドゥッラー・アル=ハティーブ監督をお迎えして、私の方で最初の30分くらいは一般的な質問をさせていただき、そのあと皆様からのQ&Aで監督に伝えていただくという形にしたいと思います。

アブドゥッラー監督は既に2021年山形国際ドキュメンタリー祭で、こういう形でインタビューに答えていただいたんですけど、本日はもう一度、日本のオーディエンスの方々がたくさん参加してくださるので、最初にメッセージをいただけたらと思います。

アブドゥッラー こんにちは。今回は『リトル・パレスティナ』について皆さんとお話する機会をいただきありがとうございます。

『リトル・パレスティナ』は岡崎さんもおっしゃったように、ヤルムーク難民キャンプに対してアサド体制が2013年から2015年まで行った包囲についての映画です。その頃、キャンプは自由シリア軍の支配下にあります。シリアの体制と戦っていた勢力です。体制側は200人くらいの武装勢力がいることを口実にして、数万人の女性や子供たちがいるキャンプを包囲したのです。これは常にアサド体制を支持する人々が使う口実で、武装勢力がいるからと言って無実の人々を虐殺したり化学兵器を使ったり包囲したことを正当化するのはです。

ヤルムーク・キャンプの包囲で問題だったのは、体制側はキャンプを包囲しながら、中にいる民間人がそこから出ていくことを禁止していたのです。私はカメラを持って、キャンプの中での日常生活をすべて撮影して、包囲下の人々が語る様々な声を伝えようと試みました。



岡崎 ありがとうございます。アブドゥッラー監督は、もともとは「SOS子供の村」調整員であったり、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)のヤルムーク・キャンプ青年部のスタッフであったりしましたが、職業映画監督ではありませんでした。しかし、特に2011年以降の民衆蜂起の中でカメラを手にとったということですけど、どのような経緯でカメラを持ち、そして撮影するようになったのか、そのあたりの経緯を教えてください。

アブドゥッラー 第一に私は映画監督ではなく、カメラマンでした。キャンプの中で映画を撮影するつもりはなくて、キャンプの住民の日常生活を撮影しようと思っただ

けのことでした。カメラマンとしての私のこの新しい役割は、子供たちの支援や様々な問題に関わる活動家としての役割と何ら矛盾するものではなかったのです。社会活動家として活動していたおかげで人々は私のことを信用してくれたし、だから彼らの撮影をしたり話を聞いたりすることもしやすかったのです。私が映画を制作しようと決めたのは、2019年にシリアから出た後のことでした。

もう一点付け加えると、戦争中には多くの人々の社会的な役割が変わったのです。例えば先生だった人が農業に従事したり、私の母も主婦だったのが看護師になった。そして私も子供たちとの仕事をしていましたが、カメラマンをするようになった。戦争の中で私たちの社会的な役割が変化したのです。

岡崎 2019年までシリア国内に滞在されたとお聞きしましたが、その後1年以上かけて、プロデューサーの支援も得つつ映画にされたということですが、撮影から編集の段階に入って、映画作品として完成させる上での新しい苦労というのは、どういうものがあつたのでしょうか。

アブドゥッラー 実際に映画を作るのにかかったのは1年ではなく2年でした。困難は色々ありました。まず第一に、自分が撮影した素材と私自身との間に距離を置いて、映像を分析的に見ることができるようにする、という難しさがありました。二つ目の難しさは、撮影した素材は、何か特定のドキュメンタリー映画を作るために撮ったものではありませんから、この映画の語りの方を模索しなければならないということでした。

三つ目は、どうすれば飢餓や戦争、包囲、虐殺についての映画でありながら、同時に人々の尊厳を守ることができるかということです。私は人々を泣かせるための映画ではなく、人々の尊厳について語る映画を作りたいかったのです。

岡崎 それは重要なポイントですけど、それはやはり、あえて使わなかった映像というのもたくさんあるということでしょうか。

アブドゥッラー もちろんそうです。約500時間分の撮影をしましたが、映画に使ったのは約1時間半ですから、498時間分がこの映画では使われていないわけです。また他の作品を作ることもできるでしょう。あるいは後々、戦争犯罪の訴追のために利用することもできるでしょう。

岡崎 映画の中身についてもお聞きしたいと思います。そもそもタイトルなんですけど、『リトル・パレスティナ』ということで、私もヤルムーク・キャンプには何度も通ったのですが、ヤルムーク・キャンプのことを『リトル・パレスティナ』と呼んでいた人はいませんでした。となれば、2011年以降の流れのなかで、パレスチナ人が経験したことと、シリア人が弾圧を受ける中で経験していたことと繋がり、それがまたヤルムーク・キャンプの経験に繋がっていったという、そういう流れのなかで付けたタイトルという理解でよろしいのでしょうか。

アブドゥッラー この題名を付けた理由はいくつかあって、一つ目は政治的な理由です。ここにいるのはパレスチナ難民であること、1948年のパレスチナ人に対する民族浄化の責任はイスラエルにあるということを思い起こさせるために、このタイトルを付けました。

二つ目の理由は、パレスチナで生まれてその後ヤルムーク・キャンプに移住して、包囲下でもキャンプを出て行こうとしなかった高齢者たちに、どうして出て行かないのかと尋ねたときに、彼らはこう言ったのです。自分たちは「大きなパレスチナ」から出て行った。けれども今度は「小さなパレスチナ」からも出て行くようなことはしない、と。

岡崎 まさに連続性ということ、そして「大きな」と「小さな」というのは、シリアでは特に監獄においては「小さな監獄」とシリアという国の「大きな監獄」という、いろんなメタファーがあります。

ところでシリアのパレスチナ人に関して言えば、あるシーンの中で、樽型爆弾の投下で殺戮と破壊を経験した後に、スローガンで「シリアとパレスチナは一つ」と、「一つ（ワーヒド）、一つ（ワーヒド）」と言いつつも、別の人は「こんな目に遭わされているのに、何が一つだ」とも述べています。映像というのは、そこにある最も深刻な矛盾というものを、一つの画面の中で多面的に表現できると思うんですけど、それもシリアのパレスチナ人の抱えた矛盾というものを意図的に映像で仕上げた、という理解でよろしいでしょうか。

アブドゥッラー まず素晴らしい質問をしてくださって嬉しいです。こんな質問をされたのは初めてのことです。素晴らしい。ありがとうございます。

ヤルムーク・キャンプはパレスチナ難民キャンプですが、実際には住民の半分はシリア人で、残りの半分がパレスチナ人です。「シリアとパレスチナは一つ」というのはシリア革命の当初、パレスチナ人がシリア革命との連帯を表明するために掲げた政治的なスローガンでした。そしてシリアの体制がヤルムーク・キャンプを包囲して爆撃を行ったのは、パレスチナ人がそういう立場をとったことを罰するためでした。それでも爆撃の中で人々がこの政治的なスローガンを叫び続けたのは、殺されても立場を変えないという意志を体制に対して表明するためでした。

ただし、それがキャンプのすべてのパレスチナ人の立場だったわけではありません。異なる声や立場もありました。シリアの革命に関与するべきではない、自分たちは関係ないという人もいました。そのような声も映画の中に取り入れようとしたわけです。

岡崎 実際、私にもシリアのパレスチナ人の友人がいますが、皆それぞれ立場が違おうし、革命にはもちろん共鳴しているという根本的なところがあったとしても、その複雑な矛盾というものをしっかり映像のなかで表現されているのかな、というのはすごくよく分かりました。

アブドゥッラー パレスチナ人というのは個人ではなくて一つの社会ですから、その

集団の中には様々な見解があって、革命を支持する人や革命に共感する人もいれば、そもそも革命に反対する人たちもいるわけです。

私がシリアの革命に参加したのは、単にパレスチナ人として参加したわけではなく、シリアのパレスチナ人として参加したのです。私はシリアで生まれたのです。もしも私がアメリカで生まれていたら、法律によってアメリカの大統領になることもできるでしょう。私はシリア生まれなのですから、シリアの革命に参加する権利があります。独裁体制はシリア人に対してだけでなく、シリアで暮らしているすべての人々に対して抑圧と暴力行為を行っているのですから。

岡崎 そのとおりですね。これは後のQ&Aで必ず訊かれると思うので先に訊きますが、この映画はやはり子供をしっかりとらえています。もともと監督は子供の支援に関して活動をしていました。映画の中でも特に後半部ですが、子供にいつそう焦点が当てられています。映画は、子供が持っている力とか未来の希望と同時にさまざまな矛盾、もしくは今にも壊れそうなガラス細工のようになんとか自分を保っている、といういろんなところを描いていますね。監督が、子供に焦点を当てようと、いつごろ、どのように思うようになったのか。そして実際に子供に焦点を当てて何が見えたのでしょうか。

アブドゥッラー 初めから子供たちに焦点を当てることは決めていました。何故ならもともとそれが、私のキャンプでの仕事だったからです。

映画の中で私が試みたのは、いくつかの語りのラインを作るということで、一つ目の線は年寄りたちでした。彼らは私たちの過去、記憶を形づくる存在です。二つ目の線が子供たちで、私たちにとって彼らは未来を形づくる存在です。私が言いたかったのは、シリアの体制が私たちの過去、記憶と、そして未来を殺し、破壊しようとしたということです。



公園で風船と戯れる幼子

映画のなかで二つの死の場面がありました。一つは年老いた女性の死、もう一つは幼い少女の死でした。そして同時に、最後の場面に出てくるアブー・ラアファトという、歌を歌っていた人物は、パレスチナに帰ってそこで平和な暮らしをする希望をまだ持っています。そして少女タスニームも、生活や包囲や将来のことについて力強く語っています。体制は大勢殺したけれども、それでもなお記憶は私たちの手の中にあり、未来は私たちの手の中にあるということです。

それから、戦争中の子供は儚くて、弱々しくて、いつも泣いていて、お母さんにいてほしくて、食べ物を欲しがっている、といったステレオタイプのイメージがありますが、私がヤルムークで見た姿はまったく異なっていました。力強く、抵抗していて、戦争や包囲についても自分たちの物の見方を持っていました。

そろそろオーディエンスの皆さんの意見も聞きたいですね。

岡崎 その前にちょっと、最後に一つ良いですかね。私も難民キャンプは訪れましたけど、いろいろ矛盾がありまして、映画の中で率直に描かれているとおり、子供のミルクを売って煙草を買うという姿もあるし、食料配布に関してはコネがある人だけもらえたり、そういう部分はどうしてもあります。しかし、同時にこの映画は、ヤルムーク・キャンプの内部からカメラでとらえることで、いかに人びとが協力しあっているか、痛みを分かち合っているか、ナレーターとして監督が語るとおり、こうした姿をものすごくとらえていると思います。監督自身も人々が苦しみのなかで協力するその姿というものをぜひとも残したいという思いというのがあったのではないのでしょうか。

アブドゥッラー 100%そのとおりです。戦時の社会的な関係における矛盾というものがあって、連帯し合う人々もいれば、利己主義的になる人々もあります。日本にも戦争の経験がありますが、きっとそういった同じような話が伝わっているのではないのでしょうか。偉大なことをして人々を助けた人たちもいれば、自分がいい暮らしをするために酷いことをした人たちもいたでしょう。戦争というのは人間の心の中にあるそういったすべての矛盾が噴き出すものです。良いことも、悪いことも。



岡崎 それでは、皆さんの質問に移りたいと思います。率直な質問で、「今、ヤルムークはどうなっているのか」という質問があるのですが、まずこれからお願いします。

アブドゥッラー 2018年にシリアの体制とロシアによってキャンプの面積の80%は破壊されてしまいました。現在キャンプには3000人ほどの人が暮らしています。もともとは50万人の住民がいましたが、現在は3000人だけが残っている状態です。破壊されているのですが、他に選択肢がない人々が残っているのです。

岡崎 必ず出る質問だと思いますが、封鎖の理由として、反政府勢力が武器を持ってヤルムーク・キャンプをある意味利用したからだというようなことが国際的に言われています。それが映画で描かれていないのはどういう意図があるのでしょうか。

アブドゥッラー チャットでその質問を見たのですが、正直言って私にとって奇妙な、挑発的な質問です。何故なら、仮にキャンプの中に〔IS指導者の〕バグダーディがいたとしても、〔アルカーイダ指導者の〕ビンラーディンやザワーヒリーがいたとしても、数万人の子供や女性たちを包囲して飢え死にさせることは正当化されることではありません。これは戦争犯罪です。

武装勢力がいるという口実でシリアの体制がヤルムークを包囲し、グータ地区を化学兵器で爆撃することを正当化するのは、第二次世界大戦中にアメリカが敵だからといって広島や長崎を核爆弾で爆撃したことを正当化するようなものです。シリアの体制が武装勢力との間に問題があるのなら、武装勢力と戦えばいいのであって、なぜ民間人を包囲しなければならないのか、ということを知りたいのです。

単純な答えですが、歴史を紐解けば分かるように、あらゆる独裁体制は自らの権力の座を守るためであれば、何千何万の人々を殺すことでも躊躇しないのです。

岡崎 タスニームなんですけど、「他の難民キャンプから来て学校にいけないと言っていました」ということで、パレスチナ人の間でもいろいろな区別や差別があって、たとえばアイデンティティ・カードとか難民証明書がないとか、さまざまな違いとか差別というのがあるのでしょうか。

アブドゥッラー そんなことはありません。私はタスニームに「誰がそんなこと言ったの？ 僕が連れて行ってあげる」と言ったのです。

私がタスニームとの対話の中で「どうして学校に行かないの？」と聞いたら、彼女が「入れてくれないから」と答えたので、私は「じゃあ僕が連れて行ってあげるよ」と言ったのです。差別などなく、誰でも入学できるということを知っていたからです。私自身が包囲中のキャンプで学校の仕事をしていたから、学校がすべての人に開かれていることを知っていたのです。彼女が学校に行かなかったのは、家族のために食べ物を手に入れないといけなかったからです。



家族のために野草を摘むタスニーム

岡崎 最後のエンディングのクレジットのところで、お父さんのジャマールさんが二年半拘束されているというところがありますけど、お父さんは今どういう状況なのでしょう。

アブドゥッラー 父は今ドイツに私と一緒にいます。詳しくは話せませんが、体調はよくないです。でも、ドイツで私と一緒にいます。シリアの体制は活動家を罰するために、家族を逮捕して圧力をかけるという手段を利用してきたのです。

岡崎 私は言及しなかったのですが、今質問が出ました。エイハム・アフマド⁹さんのピアノの演奏というのは世界的にも知られているのですが、あの曲自体は一般的にも

⁹ エイハム・アフマド (Eiham Ahmad)：シリア在住パレスチナ人のピアニスト。1988年ダマスカス南郊のパレスチナ人居住地域ヤルムーク・キャンプに生まれる。ヤルムーク封鎖下にて自らのピアノ演奏と他のキャンプ住民のコーラスを通じて世界に窮状を訴える動画を発表し、国際的に名を知られるようになった。その後ドイツに渡り、シリアの惨状を世界に伝えつつ、音楽活動に従事している。

知られているのでしょうか。

アブドゥッラー 重要な点です。ヤルムークの道端でピアノを演奏するというアイデアは、かつてはなかったことで、包囲の中で始まったことです。歌われた歌も、映画の中に出てきたのも含めてすべて、包囲の中で作られた、包囲についての歌なのです。

岡崎 ちなみにエイハムさん日本にもいらっしゃって、公演されました。

アブドゥッラー ただ正直言うと私としては、ピアニストのエイハム・アフマドさんという紹介のされ方にはやや違和感があるのです。彼個人の話のように感じるからです。実際には、あれは一つの楽団だったのです。歌を作った人もいたし、彼と一緒に歌った人もいたし、包囲の中で亡くなった人もいました。だから私はヤルムーク楽団として紹介したい気持ち強いのです。一個人ではなく、みんなの共同作業だったのです。みんなでピアノを運んで、歌詞を作って、作曲をして、エイハムにはピアノを弾く才能があった。歌う人もいて、そういう立派な楽団だったのです。一個人ではないのです。



ヤルムーク楽団

岡崎 カメラを回し始めたとき、封鎖がこれほど長期間にわたり、かつ過酷なものになることを想定していたのでしょうか。

アブドゥッラー 毎日毎日、明日には終わるんじゃないかと思っていました。でも終わりませんでした。

岡崎 ただ封鎖の状況が続く中で、撮影をやめたいとか、もしくは絶対にやめたくないというような、気持ちの変化はありましたでしょうか。

アブドゥッラー 中断したこともありました。身体的に非常に辛くて、カメラを持つこともできないような状態になって、それで中断したことがありました。

岡崎 封鎖中の電気や水、インターネットとか、そのようなインフラというのは実際どうなっていたのでしょうか。例えば学校を維持するにも先生のお給料とか、そういうロジの面とかどうなっていたのでしょうか。

アブドゥッラー インフラについては、例えば水がなければ井戸を掘ったり、電気についてはプラスチックをリサイクルして発電機を動かす燃料を作ったり、インターネットについても鉄の材料でネットをつないだりとか、いろいろ複雑な作業なので一言で説明はできませんが、インフラはそうやって工夫しました。学校やスタッフについては、ほぼ皆、無償のボランティアでやっていました。

岡崎 抽象的な質問になりますが、監督は何度も「尊厳」(カラーマ)という言葉をお使いになりますが、人間の尊厳というのはいったい何なのか、監督のお考えをぜひ聞きたいです。

アブドゥッラー おお、哲学的ですね(笑)。政治とか映画の質問ならともかく、哲学の話は少し難しいですが、答えてみましょう。

映画の中で包囲下の人間を見たときに、哀れみを感じたりはさせないということ、それが人間の尊厳だと思います。哀れみを感じさせるのではなくて、見た人が恥を覚えるか、或いは連帯を感じさせる、状況を変えるために何かしなければならないと感じさせる、そういうことだと思います。

岡崎 素晴らしいお答えですね。ありがとうございます。あとはナレーションも担当されましたけど、詩的な文章で、これは映画のために監督自身が書き下ろした文章、そしてまたこのような詩的な形で入れようと思われた経緯を説明してください。

アブドゥッラー あれは包囲の中で書かれた「包囲の四十の原理」という文章です。2014年に私が書いたものです。映画を作るにあたって、それを使おうと決めたのです。

全部の質問に答える時間があるか分かりませんが、全部の質問に答えたいので、後で連絡先をお知らせしたいと思います。誰でも質問や不明な点があったら、何でも詳しく答えたいと思います。英語でやりとりもできますので。

岡崎 いくつかまだ重要な質問がありますので、もう少し続けさせてください。シリア人とパレスチナ難民の人々が、どのように和解し共存していけるのか。パレスチナ人がシリア人に対して、今、わだかまりとか恨みみたいのがあるのであれば、どのようにしてシリア人と共存していけるのか、どのような希望を抱いているのか。

アブドゥッラー 理解の仕方が間違っていますね。質問自体が間違っている。この図をシリアの社会だと思ってください。丸がパレスチナ人で、四角がシリア人です。お互いに入り組んで暮らしているわけです。水と油ではなくて、炭酸水と普通の水みたいなもので、放っておけばお互いに混ざりあうような存在なのです。

私の3人の叔父たちはシリア人と結婚したので、その子供はシリア人なわけです。私たちは共に暮らしているだけではなくて、私だってシリアの人、シリア人です。父もシリアで生まれたのです。

岡崎 政治的なレベルと社会のレベルでは全然違うということだとも思いますけど。基本的な情報として、ヤルムークにいたパレスチナ人たちは今、どこにいますか。ドイツに向かった方もいるし、シリア内部に留まっている方もいるのでしょうか。そして子供たちもどのあたりに移っているのか。

アブドゥッラー 一部はシリア国内に、一部はシリア北部に、一部はトルコに、一部はヨーロッパにいるし、あるいはヨルダンやレバノンや、世界中にいます。ヤルム

クの難民が日本に行ったかどうかは知りませんが。

岡崎 今ドイツに住まわれてもう2、3年になると思いますが、現在の活動、そして今後伝えたいこと、もしくは行いたい活動というのはどのようなことがありますでしょうか。

アブドゥッラー 今はドイツの大学で勉強をしています。そして映画、いくつか企画はありますが、直近の企画はまたヤルムークの包囲についての映画です。

岡崎 主だった質問は全部とりあえず聞きましたけど、山本さん他にありますか。

山本 質問の方は終わりで、最後に監督の方から何かまとめてメッセージでもいただけたら、それで終了としたいと思います。よろしくお願いします。

アブドゥッラー まず本当にありがとうございました。非常に楽しい質問の数々でした。チャットで質問をたくさん見ましたが、チャンスがなくて答えられなかったものもあります。

さっきも言いましたが、誰でも質問があれば、私はインスタグラムのアカウントだけ持っていますので、今は閉じていますけど2日後にまた再開しますので、何でも質問を送ってくればお答えします。Abdallah alkhatib¹⁰という名前で、インスタグラムのアカウントがありますので。

本当に素晴らしい質疑応答でした。とても楽しい質問でした。ありがとうございました。日本の皆さんのおかげで、また新しい映画を作りたいという気持ちになりました。そしてまた皆さんとお会いすることができたらと。

岡崎 どうもありがとうございました。本来でしたら、山形映画祭の時に日本に来て、オーディエンスの皆さんと直接話し合ったりということも可能であったりするんですけど、こういうコロナの状況のなかで、オンラインではありますが、今日、本当に多くの方が、200人以上の方に参加していただきました。少なくともですね、ヤルムーク・キャンプで起こったことは、この映画で監督によって伝えられたにせよ、やはり氷山の一角の一角であると思います。にもかかわらず、なかなか世界には伝わらないというなかで、これだけの方が日本で関心を持ってこの映画を観て、実際に話を聞いてみようと思っているということは、やはりまた何か繋がりというものができるのではないかと思います。監督、今日はどうもありがとうございました。

アブドゥッラー みなさん本当にありがとうございました。素晴らしい通訳にも、岡崎さん、山本さんにも、どうもありがとうございました。

山本 今回主催しました研究プロジェクトを主宰しておられます岡真理さんのほうか

¹⁰ 監督のインスタグラム <https://www.instagram.com/a.alkateeb1/>

ら最後一言コメントいただけるということでしたので、最後よろしく申し上げます。

岡 まず最初に、アブドゥッラー監督、素晴らしい映画と本日の対話、ありがとうございました。今日ご参加の皆様、お疲れのところ申し訳ありません。最後に三点だけ、コメントさせていただきたいと思います。

1948年のナクバ以来、今年で74年になりますが、その間、デイル・ヤースィーンに始まり、タントゥーラ、ダワーイメ、リッダ／ラムレなど、ナクバのときに集団虐殺があり、そしてその後も、カフル・カースィム、タッル・ザアタル、サブラー・シャティーラ、そして2002年のジェニーン、さらに、今、完全封鎖下に置かれているガザなど、パレスチナのこの70年以上に渡る歴史のなかに、パレスチナ人の虐殺であるとか封鎖であるとか、徹底的な破壊であるとか、そうした出来事が刻まれた地名というものがたくさんありますが、今日の映画を拝見して、その歴史のなかに「ヤルムーク」という名も深く刻まれているということを感じました。

先ほどの監督さんのお話にもありましたように、ヤルムーク難民キャンプが封鎖され、政府軍の攻撃に晒されたこと。これは集団懲罰です。まさにガザの、今年で15年目を迎える封鎖と同じ状況にあるわけです。いまだにパレスチナの主権を持ったパレスチナ国家の独立、そしてパレスチナへの帰還という当然の権利を、ガザのパレスチナ人たちが諦めていない、そのことに対する集団懲罰としての封鎖であり、飢えであり、数年ごとに見舞う大規模な軍事攻撃による虐殺です。ですから、ヤルムークというのは「リトル・パレスティナ」であると同時に、「リトル・ガザ」でもあると思いました。ガザの今日的状況が、凝縮されたのがヤルムークであると感じました。

そして二点目ですが、今日、映画をご覧になった皆さんに申し上げたいのは、こうしたことが起こるのは、シリアやパレスチナなど中東のことで、日本の私たちの現実からはとても隔たった出来事のように感じられるかもしれませんが、しかし、この映画を拝見しながら、私が思い出していたのは、ウトロのことです。京都の宇治市にウトロという地域があるんですけど、そこは戦中、飛行場建設に携わっていた朝鮮出身の人たちが、日本の敗戦後も行くところがなくて、そこにずっと住んでいた、在日コリアンの集住地域です。

封鎖されて攻撃されて、というわけではないですけど、とりわけ戦後の時期というのは食べるものもなくて、というなかで、一世の人たちは故郷の記憶や、日本の植民地支配下での記憶、そして戦争中の記憶、それから戦後どうやって生き抜いてきたのか、という記憶を持っている人たちです。

そして1980年代に、この地域の住民たちは不法占拠として裁判を起こされ、強制立ち退きの危機が迫っていました。その時にですね、今日の映画と同じです、難民一世の女性たちが語っていたのと同じように、これら一世の女性たち、ハルモニたちが、ウトロは私たちの故郷、私たちはここにとどまって闘う、ここで生きて、ここで死ぬんだということを言っていました。

詳しくお話する時間はありませんが、ヤルムークの人びとが生きている思い、それと同じような思いを分かち合いながら、生きている者たちがこの日本にもいる、私

たちの隣人として生きている、私たちの社会のなかにヤルムークの人々と同じ思いで生きている者たちがいるということもぜひ、日本の皆さんに知っていただきたいと思いました。

そして最後の点なんですけど、先ほど監督もお話されましたように、この映画では一世の難民たちから三世、四世の子供たちまで描かれています。つまり、ナクバ以前のパレスチナを知る人たち、そしてナクバでどのように難民になり、難民になった後、ここでどのように生きてきたかということを記憶する人たちがいて、その記憶が娘、息子へ、そして孫たちへと伝わっていく。ヤルムーク難民キャンプというのはそうした、世代を超えて、パレスチナ及びナクバ以降のパレスチナ人の歴史を伝える、記憶を伝える、そうした空間〈トポス〉でもあったということです。

このヤルムーク難民キャンプが破壊されてしまって、住民たちの大半が世界に離散してしまっているというお話でしたが、ヤルムーク・キャンプの破壊というのは、単にそこに住んでいた人々が住いを失ってしまった、そして離散してしまったということではなく、このようにパレスチナ人が、「パレスチナ人」というアイデンティティを持って、世代を超えた「パレスチナの記憶」を持って生きるということを可能にしていたそのような場が失われて、その人たちがその共同性を破壊されて世界にディアスポラになってしまった、ということの意味ですね、これが映画の最後の、監督のお母様の言葉、「ヤルムークに帰る」という、パレスチナに帰還するための礎としてヤルムークに帰ることを望んでいるという、その言葉の中に集約されていると思いました。

アブドゥッラー ありがとうございます。非常に嬉しいです。在日朝鮮人の集住地域とヤルムークの状況を結びつけて語ってくださったのは素晴らしいと思いました。それがまさしく私の映画のメッセージの一つでした。映画を見た人はヤルムークのことだけではなく、世界中でこのような非人道的な困難な状況に苦しんでいるすべての地域や人々のことを考えるでしょう。

最後に一点、この映画の後で常に出てくる質問として「何ができるでしょうか、何をすべきでしょうか」というのがあります。それについて言いたいのは、誰を助けるかではなくて、助ければいいのです。誰に対して、ということではなく、何かすることです。ヤルムークに来て人々を助ける必要はないのです。日本で自分の身の回りを見れば、そこにはきっと困難な状況に苦しむ人々がいるでしょう。そうした人たちのために何かをすることです。

[了]

「リトル・パレスティナ 一包围下の日々」
アブドゥッラー・アル＝ハティーブ監督インタビュー
聞き手：岡崎 弘樹 / 司会：山本 薫 / 通訳：森 晋太郎

作成：ワタン研究プロジェクト
翻訳：森 晋太郎
編集：岡 真理
編集補助：中鉢夏輝（京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）
表紙デザイン・レイアウト：岡 真理
発行：2022年4月20日
連絡先：プロジェクト・ワタン事務局
projectwatan3@gmail.com
<http://www.projectwatan.jp/>

© Hiroki OKAZAKI, Abdullah Al-Khatib 2022